

国語問題

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図があるまで、開かないこと。
- 二、問題は□・□で、二十二ページにわたって印刷してあります。
ページが抜けるなどしていた場合には、試験監督の先生に申し出なさい。
- 三、解答は、すべて解答用紙に記入し、受験番号・氏名をもれなく、正確に記入すること。
- 四、問題冊子の表紙にも、受験番号・氏名を必ず記入すること。

受験番号

氏名

◎文中からそのまま抜き出して答える場合、句読点や記号は一字とすること。また、ふりがなのある漢字は、ふりがなをつけなくてもかまいません。

— 1 —
次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

室井さつきは、小学校五年生のときに、両親とともに札幌から沢北に引っ越した。しばらくして、同級生の小山内理子に「ジャンプをやってみない？」と誘われた。理子は地元でも有名なスキージャンプの選手で、将来はオリンピック選手候補と言われていた。ある日、さつきは理子に誘われて、ジャンプの大会である「吉村杯」を見に行った。そのとき、理子がテストジャンパー（選手の前に飛ぶジャンパー）として飛ぶ姿を見て興味を持ち、少年団に入ってジャンプを始めた。さつきはぐんぐん上達し、中学二年生になるころには、有力選手の一人となった。一方、理子は、成長にもなっても大人の体型になり、記録も伸び悩んでスランプにおちいった。ジュニア合宿以来、理子が練習に参加しなくなったことを心配したさつきは、理子と直接会って話す決心をした。

「理子、ごめんね」

「なにが？」

「勝手に理子のおうちに行つて、理子のお母さんと話して、理子が言ったことも私のお母さんに勝手にばらして」

「ううん、良かったよ。私一人じゃ煮詰ま^(注1)ってどうにもならなかったもの。体も……ボロボロになってただろうし」理子はいったん言葉を切り、「もしかして、冬に斉藤さんに言われた弱点とか経験とか、そういうこともおじさんとおばさんに教え^(注2)た？」と鋭いところを突いた。

さつきは嘘はつけなかった。「ごめん……す^(注3)ごいおせつかいだとはわかってたけど」

「あのとき、さつきもいたもんね。でも、本当はあれだけじゃなかったんだ。夏の大会のときにも……」

理子は斉藤選手と施設裏でかわしたやりとりを、聞こえてしまった部分も含めて、さつきに教えてくれた。

「これもあまり驚かないね。もしかして……」

さつきは思い切り謝った。「ごめんなさい！ あのときの理子の様子がどうしても気になって」

「そういえば、斉藤選手を呼んだとき、さつき、後ろにいたね」

「ごめんね。気になったから後を追って……最後のほうの斉藤選手の声しか聞こえなかったけど、甲斐さんと一緒に近くにしたの」

「甲斐さん？」名前を出してから、理子は軽く頷いた。「そういえば彼女もいたね。そっか。じゃあ大体は知っていたんだ。隠す必要、あまりなかったね」

「どうしても理子に戻ってきてほしくて、お父さんとお母さんにソウダンしちゃったの。怒ってる？」

おそるおそる尋ねると、「ちょっと目をつぶってくれる？」と言われた。そのとおりにすると、眉間を軽くはじかれた。

「このデコピンでちやらね」理子はくすくす笑った。「そうだね、圭介だったら怒るかも。要らないおせっかいはするな、そういうところがわからないから鈍感なんだ、とか」

「そういえば私、理子の家に行くとき、圭介にすごく呆れられた。ジュニアの合宿前から理子は悩んでいたのに、一番近くについて気づかないなんて鈍い、みたいな」

「そうだね……圭介みたいにイライラする人もいるかもしれないけれど、私はさつきのそういうところ、嫌いじゃないよ。私がかんなことで悩んでいるの、本当は誰にも知られたくなかったから。どうにもならなくなるまでは、さつきがわりと普段どおりで良かった」

理子は素直だった。「私ね。おじさんおばさんと話して、お母さんとも話して、ジャンプを始めたころのことを、思い出せた」
軽トラックがタイコウ車線をかけぬけていく。

「そのころの理子、見たかったな」

本心を打ち明けると、理子は □ を竦めてにこっとした。「どうして?」

「かわいかったんじゃないかって」

理子は面食らった表情をしてから、今度は声を出して笑った。

「同じだったと思うよ、少年団にいるその年頃の子たちと」

「そうかあ。じゃあ、やっぱり楽しかったんだね」

「うん、そうだね」

「理子のお母さん、言っていた。私が入団した日、すごく嬉しそうに帰ってきたって……私それを聞いて、飛んじやいそうに嬉しかった」

「……うん。実際、嬉しかったもの」

刈り取りを終えた小麦畑には、転々と巨大なロールケーキみたいな麦の束がある。

「さつきが入ってくれて、嬉しかった。怖がっているのに背中を押したのは、ちょっと悪かったかなって思っているけど、すぐに楽しかったって言ってくれて、本当に……。その日のうちに何度も飛んでいるのを見て、この子と一緒に飛べたら楽しいだろうなって、心から思った。でも」

ごめんねと、一言前置きをして、理子は静かに言った。

② 「さつきを誘わなければ良かったって思ったことも、あるんだ」

理子の涼しげな目がまっすぐにさつきに突き刺さってくる。

「さつきがあまりにも楽々と飛んで、どんどんうまく、強くなっていくから。いつか追い抜かされるって、焦って、怖くて。負けるのが、怖くて」

③ さつきさえ誘わなければ、こんな思いをしなくてすんだのに——その後悔してしまふこともあったのだと、理子は告げた。

〔注5〕「実際、もう負けちゃったし」

一瞬だけ逸らした理子の眼差しは、かすかな悲しみの色を帯びていた。

「でもね」理子はまた視線を戻した。「それでも私、さつきのジャンプ、好きだよ」

「理子……」

「ジャンプって、スタートから接地まで神経をいっぱい使って、ほんの何秒かの間にたくさんのことをしなくちゃいけないのに、さつきはすごく自然にそれをやっているみたいで、まるで、風を友達にして運んでもらっているように見えるの。空中姿勢も私よりいいし」

「すごく自由な姿だと、理子は唇をほころばせた。

「だから、大好き」

④ さつきは理子の、鞆かばんを持っていない空いている手をきゅつと握にぎった。

「私も理子のジャンプ、好きだよ。きれいで……本当にきれいで。最初からずっとそう思ってた。吉村杯のテストジャンプのときから」

「ありがとう」

「また、見たいの。一緒に飛びたい」

風になびく髪の毛をそっと押さえた理子に、さつきは訴うったえる。「私だってわかる。六年生の夏、理子が私のことをお父さんに褒ほめてくれたように、私は理子のすごさがわかる。誰だれよりわかる。サマージャンプでは、私は理子より確かに飛んだけど、でも理子に勝ったとは、思っていない」

「どうして？」

⑤ 「だって、足を骨折こっせつしているボルトに勝ったって、誰も私のほうが足はが速いなんて思わないでしょ？」

理子は苦笑くしやうした。「なにそれ？」

「斉藤さんだって、体型変化で不調になるとしても、それは一時的なものって言ったんだよね？ だったら絶対また飛べるよ」

⑥「絶対なんてことはないよ。もしかしたらこのままかもしれない。誰も保証も約束もしてくれない」

「約束がなかったら、だめなの？」

さつきは立ち止まった。さつきに手を握られている理子も、足を止める。

「一番最初にジャンプしたときは、なんの約束もなかったでしょ？ 理子は誰かに、あなたはすごい選手になる、ずっと勝ち続ける、将来はオリンピックピック選手になるって約束されたから、ジャンプを始めたわけじゃないよね？」

理子に伝えたいことが心の中でいっぱいになって、さつきはどういう言葉でそれらを表現していいのかわからない。だからせめてとばかりに、握る手に力を込める。

④「理子も最初飛べなくて、永井コーチに背中押されたんだよね。それからどうしてジャンプ続けようって思ったの？」
イタいと言われるかもしれないけれど、さつきは握る力を緩められなかった。

「ただ単純に好きになったからじゃないの？ 楽しかったからじゃないの？ 私はそうだったよ。言ったよね、理子のお母さんの言葉。私が入団した日、理子は嬉しそうに帰ってきたって」

「さつき、聞いた」

「理子のお母さん、まるで、入団したばかりのときに戻ったみたいだったって、言ったんだよ」

町中へ向かうバスが、二人を追いこしていく。

「勝つのも嬉しいけど、それよりもなによりも、私はジャンプが好きで、理子と一緒に飛ぶのが楽しいから飛んでるよ」

「さつき……」

「負けるのって嫌なことだっていうのはわかるよ。理子の本当の悔しさとか、辛さとか、そういうのはなにからなにまでわかってないかもしれないけど、いい気分じゃないことくらいはわかる。でも、それは全部を消しちゃうものなのかな。楽しさや嬉しさも全部消えちゃうの？」

(注9)低い山際に落ちるぎりぎり手前の夕日が、理子の顔を横から照らして、その瞳の色を薄く透けさせる。

「私は、もう一度理子と飛びたい。理子だつて心のどこかでは、このままやめたくないって思っているよね？ お母さんから聞いたの。理子、昨日お母さんが勧めたお菓子を食べなかつたつて。もしやめる気なら、体重とか体型とか、もう気にする必要もないもん。違う？」

理子は微笑んだ。「違わないよ」

「私、理子がいると強くなれる気がするんだ。もつと飛べる気がする。そして、理子がお父さんに言ってくれたことを証明したい。それから……ちゃんと、本当に、理子に勝ちたい。迷っている途中の理子じゃなくて、本当の理子に勝ちたい」

理子は力のある眼差しで、きちんとさつきを見返している。

さつきは思い切つて、一番重要な問いを投げかけた。

「理子。ジャンプ、嫌い？」

理子は首を横に振った。

「ううん、大好きだよ」

はつきりと、力強く、理子は断じた。「大丈夫。私、もう答えは出してるの。決めたからお礼にも来たんだよ」

やめない。斉藤選手を見返す。

⑦ 理子の手がさつきの手をぎゅつと握り返してきた。

歩いて帰るはずの道のりの半分くらいで、陽はすっかり落ちて、あたりが暗くなつてしまった。

歩けないこともないけれど、停留所と待合小屋を見つけて、そこでバスを待つことにする。理子は鞆の中から財布を取り出し、小銭を確認した。

明日から練習に行くと、理子は言った。

「うん、うん。一緒に行こう」

(今までみたいにならぬ)

「あのね、おじさんとおばさんは私の『弱点』のヒントをくれたの」

「じゃあ、『弱点』がもしかしてわかった？」

確認するさつきに、理子はこっくりと首を縦に振った。

「自慢に聞こえるかもしれないけれど、私、この夏みたいに負けたことってなかった。そうなの、ジャンプを始めてすぐうまく飛べるようになって、それからなに一つ、つまりかずに来た——ちょうど今のさつきと同じ。おじさんとおばさんに言われて順を追って振り返ってみて、これかな、って思った」

齊藤選手が『弱点』を指摘したのは、まだ理子が勝ち続けていた冬のシーズンだった。

「もしかして、負ける経験をしていないことがそうかもしれない……ううん、それだけじゃなくて」

理子は自分自身に言い聞かせるような口ぶりだった。

「負けて、スランプの時期を過ごして、辛い思いをして、なおかつそれを乗り越える、そんな経験のことを、齊藤さんは言うたのかなって。もちろん、これが本当に正解かどうかはわからないけれど」

理子は待合小屋の中のベンチに腰かけながら、その場にさつきしかいないのに、満座の聴衆を前にしているかのように、きりりと背を伸ばした。

「負けを知って、それでも諦めずに、投げ出さずに練習を続けて、苦しい時期を耐える経験は、絶対マイナスにならないと思うの。たとえば、最終的に報われなかったとしても」

その言葉は、とてもスムーズにさつきの胸の内に落ちた。

(ああ、そうだ。きつとそのとおりだ。)

そして、さつきの頭に今よりも幼い理子の声がよみがえる。

(あれと同じだ)

「理子は正しいよ」

さつきは心をこめて告げた。

「だって、理子自身が最初に言ってたでしょ？」

なにを？ という表情をした理子に、今度はさつきからあの言葉を返す。

『向かい風は、大きく飛ぶためのチャンスなんだよ』

理子の唇が、あ、という形に開き、続いてきつく引き結ばれ、それからゆっくりと微笑みを作る。

「忘れてなかったんだ、さつき」

「忘れるわないよ」

⑨ 理子は、宵の明星が輝く西空を見た。
(注10) よいみょうじょうかがや

「今はチャンスだったんだね。だから」

もう逃げない。

どんなに辛くても這いあがってみせる。

「さつきは私に勝ったと思っていないと言ってくれたけど、事実私は負けたんだから」

理子の横顔はさりと凍々しく、暗がりの中でもなによりきれいだった。

「今度は私が、さつきを追いかける。そして、追い抜く」

さつきは、まだこんな経験をしていないんだから——理子は語気も強く言い切る。

「これを取り越えられたら、私は前より強くなる。負けたくない。さつきにも、甲斐さんにも、斉藤さんにも。なにより、逃げたい気持ちにも」

バスのヘッドライトが近づいてきた。

(注1) 煮詰まって……行きづまり、頭が働かなくなつて。

(注2) 斉藤さん……スキージャンプの選手で、現在は大学生になつてゐる。以前、体型変化による不調に悩んでゐた。

(注3) 甲斐さん……理子やさつきと同級生の選手で、二人のライバルでもある。

(注4) 圭介……理子の幼なじみで、スキージャンプの選手だったが、現在は競技を中断している。

(注5) 「実際、もう負けちゃつたし」……理子は、サマージャンプの大会で初めてさつきに負け、優勝をのがした。

(注6) 接地……地面につくこと。ここでは、スキーの板が雪面につくこと。

(注7) サマージャンプ……雪の降らない夏に行うスキージャンプのこと。

(注8) ボルト……ウサイン・ボルト(一九八六)。中央アメリカのジャマイカ出身の陸上選手で、100メートル走の世界記録を持つてゐる。

(注9) 山際……山に接している空。

(注10) 宵の明星……日が沈んでから、西の空に見える金星。

(注11) ヘッドライト……車の前方についているライト。

問一 〓線 ㉑㉒の漢字はひらがなに、カタカナは漢字にそれぞれ直して書きなさい。

問二 〓線 ㉑「すごいおせっかいだとはわかつてたけど」とありますが、本文中における「おせっかい」の内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 理子を心配するあまり、圭介にまで理子の個人的な事情を聞き出そうとしたこと。

イ 斉藤選手と理子の問題なのに、よけいなことをして二人の関係を悪化させたこと。

ウ 頼まれてもいないのに、理子に関する話をさつきの両親にしてしまったこと。

エ 両親だけでなく、甲斐さんや圭介にまで理子の秘密を漏らしてしまったこと。

問三 □ に入ることばとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 腕うで
- イ 首
- ウ 目
- エ 肩かた

問四 〰️線④「面食らった」・⑤「凜々しく」の意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

④「面食らった」

- ア 弱みを突かれてはつとした
- イ 突然とつぜんのことに驚きあわてた
- ウ 褒められて恥ずかしくなった
- エ 場違いちがいな意見がっかりした

⑤「凜々しく」

- ア 落ちつきはらっている
- イ むじやきで純粹じゅんずいである
- ウ 強がって無理をしている
- エ 姿や態度がひきしまっている

問五 線②「理子の涼しげな目がまっすぐにさつきに突き刺さってくる」とありますが、この場面における理子の様子ようすの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 嫌いやがるようなことをわざと言って、さつきがどのような態度に出るのか見きわめようとしている。
- イ さつきの無神経な態度にすっかりあきれ、さつきとの関係を終わりにしたいという意思を示している。
- ウ 感情にまかせるのではなく、ことばを選び、さつきに対して正直な気持ちを伝えようとしている。
- エ 素直で正直なさつきの態度に感動し、自分もさつきのように、ありのままの姿を見せようとしている。

問六 線③「さつきさえ誘わなければ、こんな思いをしなくてすんだのに——そう後悔してしまふこともあったのだ」とありますが、理子はどのような気持ちを抱いだいていたのでしょうか。「さつきさえ誘わなければ、」の、と後悔する気持ち。」の形になるように、二十五字以上三十五字以内で答えなさい。

問七 — 線④「さつきは理子の、鞆を持っていない空いている手をきゅっと握った」とありますが、このときのさつきの気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 理子に自分の気持ちを精一杯伝えようとしている。
- イ 理子に、本音を話してほしいと思っている。
- ウ 理子をなんとかして引きとめようとしている。
- エ 理子も自分のことを好きだと知り、ほっとしている。

問八 — 線⑤「だって、足を骨折しているボルトに勝ったって、誰も私のほうが足が速いなんて思わないでしょ？」とありますが、このたとえ話の中でさつきが言おうとしていることは何ですか。「〜ということ。」に続くように、三十字以上三十五字以内で答えなさい。

問九 — 線⑥「約束がなかったら、だめなの？」とありますが、このとき、さつきが理子に言いたかったこととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア オリンピックに出るようなすごい選手になるからジャンプを始めたのではなく、楽しいから始めたはずなので、始めたばかりの頃の気持ちに戻り、ジャンプを続けると決断してほしい。
- イ 自分は、理子のような選手になりたいと思っただけでジャンプを始め、今はジャンプが楽しくてしかたがないので、理子にも自分と同じようにジャンプを楽しんでほしい。
- ウ 約束や保証があることによって理子がんばれるのであれば、オリンピックに出るようなすごい選手になると約束してあげるので、どうか自分と一緒にジャンプを続けてほしい。
- エ あと少しでオリンピック出場の夢がかなうのに、それをあっさりあきらめてしまうのはあまりにもったいないので、ジャンプをやめてしまおうという考えは改めてほしい。

問十 — 線⑦「理子の手がさつきの手をぎゅつと握り返してきた」とありますが、このときの理子の意志として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分を追い詰めた斉藤選手に勝って、自分のほんとうの実力を証明したい。
- イ 心の整理はすでにいたので、これからもジャンプを続け、さらに成長したい。
- ウ 今後は、自分を支え、勇気づけてくれたみんなのためにジャンプを続けたい。
- エ さつきが自分を叱^{しか}ってくれたことに、心から感謝の気持ちを伝えたい。

問十一 — 線⑧「これかな、って思った」とありますが、理子は、自分の弱点が何であることに気づいたのでしょうか。これより後の本文中にあることばを使って、「〜こと。」に続くように、二十五字以上三十五字以内で答えなさい。

問十二 — 線⑨「理子は、宵の明星が輝く西空を見た」とありますが、この場面から読み取れる理子の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア どん底にいる自分にとって、宵の明星のように自分を照らしてくれるさつきの存在をありがたいと感じている。
- イ 自分を追い抜いたさつきに複雑な気持ちを抱きながら、さつきに追いつきたいという思いを新たにしている。
- ウ 以前さつきにかけたことばが、今は自分を励^ほまし、導くことばとなつて、前向きな気持ちになつている。
- エ 自分も誰かを勇気づけ、励ますことができるのだということに気づき、もっと強い人間になろうと誓^{ちか}っている。

問十三

――線「向かい風は、大きく飛ぶためのチャンスなんだよ」ということばの意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア いつスランプが来てもいいように心の準備をすることが、勝利に近づくための大切な一歩となる。
- イ ライバルが多ければ多いほど「負けたくない」という気持ちが強くなり、心も体も鍛えることができる。
- ウ 誰も分かってくれないと思っている時でも、自分を理解してくれる人は必ずいて、自分を助けてくれる。
- エ 困難な状況から目をそむけずに立ち向かい、乗り越えることによって、ひと回り成長することができる。

二

次の文章は、「人はなんのために生きるのでしょうか」という問いに対して、二人の哲学者が答えたものです。IとIIの文章を読み、後の問いに答えなさい。

I 佐野洋子の『100万回生きたねこ』という絵本があります。主人公のトラ猫は、何度死んでも生まれ変わることでできる

猫でした。死ぬたびに飼い主たちは猫の死を悼んで涙を流しますが、猫はその様子を冷やかに眺めるだけでした。あるとき野良猫に生まれて自由な生活を満喫していた主人公は、一匹の白い猫に恋心を懐きます。やがて二匹は結ばれて、たくさんの子猫に恵まれて幸せな日々を過ごしますが、年老いた白猫は先に息を引き取ります。猫は悲しくて、何日も泣いたあげく、白い猫のそばで動かなくなります。猫は、今度ばかりは生き返ることはありませんでした…。

どうして主人公は生まれ変わって、新しい生を求めようとはしなかったのでしょうか。「ねこは、白いねことたくさんの子ねこを、自分よりもすきなくらいでした」という言葉が鍵になるように思います。猫は100万回の生死の果てに、その人(猫)なしには生きる意味を見出しえない存在に出会ったのです。初めて自分よりも大切なものを見つけたのです。

私は、自身より価値あるものの探求と発見こそが、何のために生きるのかという問いに対する一つの答えではないかと思っています。古典には、それを示唆するようなたくさんのエピソードが綴られています。

平安時代の説話文学『今昔物語集』の「一話です。昔、ある寺に一人の僧が住んでいて、『法華経』を読むことを日課としていました。いつしかそこに龍がタズねてきて、読経を聴くようになりました。僧と龍はとても仲のいい友人になりました。

ある年、畿内はひどい日照りに襲われました。まったく雨が降らず、すべての穀物は枯れてしまいました。この当時、雨を司っているのは龍であると信じられていました。龍と仲のいい僧の話聞いた天皇は彼を呼び出し、龍に頼んで雨を降らせるよう厳命し、それができないなら僧が日本にいられなくすると申し渡しました。

寺に帰った僧がこのことを龍に話すと、龍は実は雨を支配しているのは自分ではなく、天界に住む守護神であること、もし

自分が勝手に天の「雨戸」を開いて雨を降らせれば、神々に殺されてしまうと話しました。その上で、長年の恩に報いるためにあえて雨戸を開けるが、自分の死体のある池のほとりに供養のために寺を建てて欲しいと告げて、天に昇っていきました。^③

果たして龍の言葉通り、すぐに雨が降り始め、三日三晩止むことはありませんでした。雨が上がった後、龍が話した山上の池をタズねると、水は紅く染まり、池のなかにはばらばらになった龍の死骸がありました。僧は龍の願い通りそこに寺を建て、冥福を祈りました……。

〈中略〉

Ⅱ なのためという問いは、私たちに選択と決断を迫るものであり、私たちはその答えを自分自身で追求していくしかないのです。重要なことは、「なのために生きているのか」ではなく、「どのように生きていくのか」にほかなりません。

このことを考える手がかりとして、フリードリヒ・ニーチェの自伝『この人を見よ』を紹介します。ニーチェが自身の思索の遍歴と主要な著作について回顧したこの著作には、彼の思想のエッセンスがつまっています。題名の「この人を見よ」は新約聖書に由来しますが、注目すべきことはニーチェがこれに「ひとはいかにして本来のおのれになるか」(手塚富雄訳)という副題をつけていることで、この言葉こそが全篇を貫くテーマとなっています。

〈中略〉

ニーチェのこの問いは、「自分自身を一個の運命のように受けとること、自分が『別のあり方』であれと望まぬこと」、すなわち「運命愛」によって今の自分自身を全面的に肯定することを、私たちに促すものです。私たちに与えられているのは、現に生きているこの人生だけであり、ほかにはなにもありません。そして、^④そこでなにをなしとげるかは自分自身の生き方によって確認していくしかないのです。今の自分の境涯を嘆いて「別のあり方」を望んだところで、それは空しいことです。^⑤

自分を「一個の運命」として決然と受け入れることで、積極的に力強い生き方が可能となります。

B

ここでニーチェが

A

今の

私たちに問いかけているのは、「どのようにしてこの自分を生き抜くか」ということにほかならないのです。

そうした私たちのソウゾウ的な生き方を可能にするのは、精神の自由な飛翔(注11)ひしょうであり、それは自分に対する確固たる自信と信頼によつてますます輝かしいものとなります。『このことができるのはわたしだけだ』と認識する「自由において、私たちはもつとも生き生きとした精神的活動ができるのだと、ニーチェは述べています。さまざまな可能性があるなかで、自らの主体的選択により本来的な自分を切り開こうとするとき、みなさんの未来は実り豊かなものとなり得るのです。』わたしは自分の未来を——ひろびろとした未来を！——静かな海を見るような気持ちで見ている」。

とはいえ、みなさんはこれから先の人生において、さまざまな挫折さつせつを味わい、苦い涙をいくたびも流すかもしれません。「今までよりいっそうおほつかなく、いっそう感じやすく、いっそうもろく、いっそう打ちくだかれた状態」になつて、前途(6)ぜんとに希望を感じられなくなることもあるでしょう。

「C」、みなさんは自身で選択した進路を戸惑とまむいながらも歩み続けることで、「いっそう豊かになり、新しい自分になり」、「まだ名づけようもない希望にみち、新しい意志と奔流(注12)ほんりゅう」にみちた自分を感じ取つて、より高い自己への向上を目指すようになるはずです。

今ある自分とその境涯がまさに現にある通りではないことを受け入れたうえで、それを自らの充実じゅうじつした生を実現する方向へと意志的に変えていくことによつて、みなさんの人生に「なんのために生きていくのか」という意味を与えることができるのです。たとえ「生のもつとも異様な、そして苛烈(注13)かれつな諸問題」に見舞まわれても、自分自身の「生に対して(注14)しにか』然り』ということが、(注15)「窮極きゆうごく的な、この上なく喜びにあふれた、過剰かじょうなまでの意気盛んな生命肯定」なのだ、ニーチェは訴えかけます。今を生きるこの自分自身の生命を肯定することこそが、なんのために生きていくのかの大前提です。

ニーチェは、「君たちはまだ君たち自身をさがし求めなかつた。さがし求めぬうちにわたしを見いだした。(中略)いまわたしは君たちに命令する。わたしを捨て、君たち自身を見いだすことと述べ、ニーチェを乗り越こえて自己探求していくことを読者に対して求めます。古典と出会い、それに感銘かんめいを受けた後には、その感銘を手がかりにして私たちは自己探求をはじめ

なければなりません。古典を読むことの意義は、「見いだした」古典を捨てて自分自身をさがし求めはじめることにあります。なんのために生きているのかという疑問を、なんのために生きていくのかという主体的な問いとして受けとめ直し、これからの人生行路を前向きに切り開いていくことが重要です。「いつさいの『そうであった』を『わたしはそう欲したのだ』に造り変えること——これこそはじめて救済の名に値しよう」というニーチェのメッセージは、将来への不安に思い悩むみなさんへの励ましとなるのではないのでしょうか。「約束の中にこもる大いなる安らぎ、単なる約束で終るはずのない未来へのこの幸福な展望！」こそ、『この人を見よ』から私たちが読みとるべき希望の伝言なのです。

（中島隆博・梶原三恵子・納富信留・吉水千鶴子
『扉をひらく哲学―人生の鍵は古典の中にある』）

（注1）悼んで……悲しみなげいて。

（注2）満喫……心ゆくまで十分に味わうこと。

（注3）示唆……それとなく示すこと。

（注4）法華経……経典（仏の教えをまとめたもの）の一つ。なお、「読経」は経典を読むことである。

（注5）畿内……現在の近畿地方のあたり。

（注6）フリードリヒ・ニーチェ……（一八四四～一九〇〇）。ドイツの哲学者。

（注7）思索の遍歴……「思索」は、本質を知るために深く考えること。「遍歴」はその経験を重ねること。

（注8）回顧……ふり返ること。

（注9）エッセンス……物事の最も重要な部分。

（注10）境涯……ふり返って見た、これまでの人生。

（注11）飛翔……羽ばたくこと。

（注12）奔流……激しく流れる水。

（注13）苛烈……厳しく激しいようす。

（注14）然り……そうだ。その通りだ。

（注15）窮極的な……おし進めた結果、最後まで行き着いたさま。

問一 〓線㉑㉒の漢字はひらがなに、カタカナは漢字にそれぞれ直して書きなさい。

問二 〓線①「猫はその様子を冷やかに眺めるだけでした」とありますが、なぜトラ猫は「冷やかに眺めて」いたのでしょうか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア いくらなげき悲しんでも生き返るはずはないのに、泣き続けているのは幼稚だと思うから。
- イ トラ猫にとって死ぬということは、次に生まれ変わることにへの喜びを意味していたから。
- ウ そのうち次の猫に出会えるのに、その場かぎりの感情で悲しむ人間をおろかだと思うから。
- エ 生まれ変わることのできるトラ猫にとって、「死」はまったく悲しいできごとではないから。

問三 〓線㉑㉒「鍵になる」・㉓「意気盛んな」の意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

㉑「鍵になる」

- ア 重要な手がかりとなっている
- イ 新しい情報を与えてくれている
- ウ 内容が完全に一致している
- エ ほんとうの答えが隠れている

㉓「意気盛んな」

- ア とても迫力がある
- イ 誰よりもすぐれている
- ウ 気力にあふれている
- エ どんな困難にも打ち勝つ

問四

——線②「このこと」とありますが、天皇が僧に話した内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 龍と暮らしたければ、守護神に命じて雨を降らせよ。

イ このまま日本にいたいならば、龍に頼んでこの地に雨を降らせよ。

ウ 龍の力が本物であるならば、雨を降らせるよう、龍に命じよ。

エ ほんとうに龍と仲がよいのならば、守護神と力を合わせて雨を降らせよ。

問五

——線③「天に昇っていきました」とありますが、龍はなぜ天の「雨戸」を開けに行ったのでしょうか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 天界に住む守護神に頼んで大雨を降らせ、思い上がった人間たちに仕返ししようと考えたから。

イ 守護神に事情を話せば、天の「雨戸」を開いて雨を降らせてくれるかもしれないと期待したから。

ウ 自分のせいで僧が殺されるかもしれないと知り、これ以上僧に迷惑わづらをかけたくなかったから。

エ 僧はかけがえのない友人なので、いま自分ができるかぎりのことをしてあげたいと思ったから。

問六

——線④「そこ」が指し示す内容を本文中から十一字で探し、そのまま抜き出して答えなさい。

問七

——線⑤「それは空しいことです」とありますが、なぜ空しいのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 他人と生活を共にしていても、ほんとうに自分の心を理解できる人間は、自分以外にはいないから。

イ どんなに今の自分や自分の生き方が好きになれなくても、別の人間として生きることとはできないから。

ウ どんなに自分の人生を後悔しても、生まれ変わってもう一度人生をやり直すことはできないから。

エ 他人の考えをすべて受け入れていると、自分自身を見失い、生きがいを感じられなくなってしまうから。

問八 A C に入ることばとして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア しかし イ つまり ウ そして エ むしろ

問九 — 線⑥「前途」のあとに同じ漢字を二字書き、「未来が明るく開けている」という意味の四字熟語を完成させなさい。

問十 — 線⑦「いまわたしは君たちに命令する」とありますが、ニーチェは「君たち」に何を求めているのでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 他人から教えを受ける段階から抜けだし、自分自身とまっすぐ向き合い、自分だけの人生を見つけるために行動すること。
イ 他人から教えを受けた恩をけつして忘れず心にとどめ、いつの日か、自分が他人を教え導くための知恵として生かすこと。
ウ 自分と他者、または自分と社会との関係性に目を向け、社会貢献こっけんという視点に立って、自分という存在を見つめ直すこと。
エ これまでになかったような新しい考え方を見つけ出し、これから生きる人々を一人でも多く救済するよう努力すること。

問十一 IとIIの文章を読んだ後に生徒が感想を話し合いました。次の文を読み、後の[1]と[3]の問いに答えなさい。

先 生…「今日はみなさんに『人はなんのために生きるのでしょうか』という問いに対して、二人の哲学者が答えた文章を読んでもらいました。どのように感じましたか？」

梅田さん…「IもIIも、深く考えさせられる文章でした。普段の生活の中では、『生きる意味』について自分から考えたことなどなかったのです。」

松本さん…「私は、『100万回生きたねこ』を読んだことがあるので、Iの文章が心に残りました。⁽¹⁾トラ猫が、白い猫の横で泣き、二度と生まれ変わらなくなった場面では、涙が止まりませんでした。また、『今昔物語集』では、龍と僧の厚い友情が胸に迫りました。」

竹井さん…「でも、龍は僧のために命を捧げたんでしょ？ 私は他人のために自分を犠牲にしたくはないから、『他人のことなど考えずに、自分の好きなように生きなさい』って応援しているIIの文章のほうが好きだな。」

桜木さん…「それは違うよ。たしかにIIの文章では、『自由』ということばが何度も使われているけど、ニーチェは、『自分の未来は自分の手で切り開きなさい』つまり、『自分だけの人生を作り出しなさい』と言っているんだよ。」

梅田さん…「たしかに。桜木さんの言うとおり、IIの文章では、『なんのために生きているか』というよりは、『(2)して生きていくのか』ということに重点を置いているよね。」

菊川さん…「生きていれば、楽しいことばかりではなく、つらいこともたくさんある。自分がいやになったり、他人をうらやんだりしてしまうこともあるよね。『なんで自分だけ』って思ってしまうことも。でも、(3)ことによって、自分の人生をより豊かにすることができるのね。」

竹井さん…「そうか。Iの文章もIIの文章も、生きること前向きにとらえているんだね。逆のことを言っていると思うけど、どっちも『自分の人生を大切に生きる』ということに変わりはないんだね。それにしても、最後のことははずいぶん難しいな。将来の不安に思い悩む人に、どのような希望を与えてくれるの？」

松本さん…「菊川さんが言ってくれたように、『(3)』ということなんだと思うよ。本文でも、くり返し言っているよね。」

先 生…「それぞれ自分なりに考えて、意見を言ってくれましたね。『生きることの意味』については、多くの人が本を出しています。図書館に行つて、たくさん作品に出会ってくださいね。」

[1] —線(1)「トラ猫が、白い猫の横で泣き、二度と生まれ変わらなくなった」とありますが、トラ猫はなぜこの時に限って生まれ変わらなかったのでしょうか。その理由を [I] の本文中から二十字以内で探し、「…から。」に続くように、はじめと終わりの三字ずつを抜き出して答えなさい。

[2] [2] に入ることばを [II] の本文中から探し、五字以内で抜き出して答えなさい。

[3] [3] に共通して入ることばとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分には、ほかの誰も持っていないようなすばらしい才能があるのだということを固く信じ、その才能が花開く日を待ちながら、ひたすら努力し続ける

イ どんなにつらい運命に見舞われたとしても、自分を支え、助けてくれた人たちのことを思い出し、一人でも多くの人を助けることによって恩返しする

ウ 人生の中でつらく苦しい出来事に直面し、逃げ出したくなっても、自分の人生をまるごと受け入れ、迷ってもよいので、自分の意志で選びながら前に進む

エ 他者の短所よりも長所に目を向けて、おたがいの個性を尊重しながら、よりよい社会を作り出すために、さまざまな考え方を積極的に取り入れる